(2)「日本震災史概説」(1923)

木宮泰彦「日本震災史概説」の概要[1]

中野　直樹（編著）

木宮泰彦（1887－1969）の「日本震災史概説」は、喜田貞吉（1871－1939）が主筆する『社会史研究』（『民族と歴史』から改題）第10巻4号に掲載された論文である。書誌情報は下記の通り。

木宮泰彦「日本震災史概説」、『社会史研究』第10巻4号〔日本震災史〕（東京：日本学術普及会、1923年12月）、pp.1－17。
木宮泰彦「日本震災史概説」、奈良県部落解放研究所編集『民族と歴史』〔復刻版〕東京：不二出版、1997年。

『社会史研究』第10巻4号は「日本震災史」と題する特集号であり、本号の冒頭（本文とは別のp.1－2）に「日本震災史に就いて」という主旨説明がある。この主旨説明によれば、このたびの特集は「今年九月一日より三日に亘れる関東地方の大震災」、すなわち1923年の関東大震災をきっかけにして編んだものであるという。地震と火災との併発に注目し（p.1）、復興以上の建設に進むため、日本の先人たちの努力の跡を顧みようと試みたのである（p.2）。木宮の巻頭論文がこの特集の総論に当たり、日本の震災史を概説する。本誌には所収論文7編があり、それぞれが各論となっている。基本的には日本史上の大きな地震をそれぞれ時系列的に扱う。さらに比較の視点から「支那における地震」を載せ、参考資料として「日本地震年表」も収録する。

木宮泰彦「日本震災史概説」は十章に分かれる。内容は大きく、前半と後半に二分でき、前半（一から六まで）は日本史上の地震を概観する。後半（七から十まで）は、関東大震災で生じた問題を克服するために、特に江戸時代の明暦の大火（1657年3月）での政府の対応を紹介する。後半はいわば歴史に基づく政策提言だともいえよう。

[1] 概要は、常葉大学共同研究に基づく読書会における参加者（中野直樹、若松大祐）の作成したレジュメを参照して作成した。

前半では、一で日本には過去千数百回の地震（の記録）のあったことを指摘する。木宮は震災の古名から説明を始め、各名称について典拠を挙げつつ説明している[2]。『日本書紀』や『古事類苑』にも地震の記事があり、これらを総合的に記述することで地震研究に寄与できる可能性を説く。なお、中国地方では地震の記録が少ないことから、木宮は今村明恒（1870－1948）の山陽道帝都説に理解を示す。

二では、天武天皇の時代に起きた地震について『日本書紀』の記述を用いつつ、回数と規模を記述する。

三以降は、各時代における地震の様相について順に説明する。三では、奈良時代を取り上げる[3]。海嘯（津波）と同時に川壅の危険性に触れる。この時代の地震の記述は『続日本紀』と『信越地震記』からが中心である。それらによれば、この時期の震災被害の規模とその発生時期について割りに詳しい記述が得られるようである。聖武天皇が、震災被害から民のために『最勝王経』・『大集経』・『大般若経』を読ましめたことなども記述されている[4]。

四では、平安時代と鎌倉時代の震災被害について規模と発生年が書かれている。平安時代の震災についての主な典拠は、『日本書紀』を除く『六国史』と『日本紀略』、『扶桑略記』である。鎌倉時代の資料としては『吾妻鏡』、種々の私記[5]が挙げられている。章末には、陰陽道の役割と改元のことが述べられる。

五では、室町時代から戦国時代までの震災について規模と発生年月日等が記述される。室町時代の資料は『後法興院記』、『永録年代記』[6]、『足利季世記』、『高代寺日記』、『応仁後記』が注に挙がる。織豊期の資料には、『清正記』、『泰平年表』（東照宮）が挙がる。

---

[2] 今回挙げられた、谷川士清『和訓栞』・新井白石『東雅』・越谷吾山『物類称呼』はいずれも日本語資料として重要だが、いずれもそのまま信用してよい資料ではない（なお、論文本文注１は倭訓栞の誤り）。木宮自身もこういった記述が文献にあるという紹介程度のつもりであろう。なお、『日本国語大辞典』（第二版）には、地震の呼名「なゐ」について、大地という意味が『日本書紀』に見えることと、語源を六つ挙げている。１、ネユリ（根揺）の約転か〔大言海〕。２、ニハワリ（庭破）の反。また、ニハユリ（庭揺）の反〔名語記〕。３、ナリヰ（鳴居）の義〔名言通・和訓栞〕。４、ナイリ（泥犁）の略。ナイリは黄泉の義〔和語私臆鈔〕。５、ナヰフル（地震）の下略。ナは土の義。ヰは場所や物の存在を明らかにする語尾〔日本の言葉＝新村出〕。６、ネヰフル（根居震）の下略〔日本語原学＝林甕臣〕。→「ないふる」の語源説。

[3] 論文本文注４の類字は衍字か。

[4] 仏教受容史上から注目される。

[5] 公家の日記の類か。

[6] 『永禄年代記』の誤り。

六では江戸時代の地震に議論が及ぶ。木宮は安政二年（1855 年）の大地震だけでなく、その予兆として前年からの異常気象にも着目する[7]。資料として『徳川実記』、『事語継志録』、『窓の須佐美』、『続地震雑纂』、『続徳川実記』、『震雷考説』、『泰平年表』（常憲公）が挙がる。近世の資料はかなり記述が詳しかったと見え、震災の発生日時とその規模だけでなく、被災人数や当時の社会状況も記述されている。

後半の七では地震のみならず火災へも着目する必要性を説く。そして関東大震火（関東大震災）と比較すべきものとして、明暦の大火を挙げる。大火直後に生じた食糧問題、江戸復興問題、失業者問題に言及する。江戸における火災の被害の大きさや、供養の様子などを記述する。資料としては『徳川実記』が挙がる。

八は、震災において生じる食糧不足や当時の政治決定など関連問題を論じる。米の支給の在り方などが詳しい。

九は、江戸における復興事業について述べられる。どういった指示が幕府側からなされていたのか、場所や金額など詳細である。

十は最終章となっている。この章では前章に引き続き震災に関連する問題として、失業者問題が取り上げられている。この問題に対する幕府の対応が記述されている。

木宮の「日本震災史概説」が説くのは、地震という観点から見た日本史であり、また日本史における地震である。簡にして要を得た論文であり、わずか 17 ページでありながら、1500 年にわたる日本の地震を概観することができる。

〈関連サイト〉

https://www.timr.or.jp/library/degitalarchives_kantodaishinsai.html

ホーム > 市政専門図書館 > デジタルアーカイブス > 関東大震災に関する資料

https://www.timr.or.jp/degitalarchives_kantodaishinsai/OA-0260/OA-0260_001.html

2-4. 震災誌（体験記・所感を含む）

OA-0260

「日本震災史」（日本学術普及会『社会史研究』第 10 巻 4 号 1923.12）

[7] 安政大地震の発生を前年の異常気象から理解するためには、そもそも地震と異常気象との因果関係の説明が必要になろう。